



どうなる 私たちの老後

超高齢社会に生きる

貞静学園短期大学学長 奥 明子

最近テレビや新聞でも頻繁に取り上げられていますが、日本の高齢化は団塊の世代が65歳を迎えた現在、総人口に占める割合が、25.1%（2013・10総務省・「人口推計」となり、4人に1人が65歳以上の高齢者となっています。このまま高齢化が進むと2035年には3人に1人が65歳以上の高齢者という社会になります。もう待たなしの介護対策が必要で、自治体をはじめとしてNPO法人等が、様々な方面から介護予防・在宅介護の充実を図るための施策を取りはじめています。

増え続ける高齢者

でも、現実はどうでしょう。要介護3〜5の方が入居できる特別養護老人ホーム（特養）への「入居待ち」高齢者が2013年秋の時点で約52万2千人（含複数申込者）にの

ぼることが厚生労働省の集計でわかりました。これは、4年前の前回調査より約10万人増え、待機者のうち、入居の必要性が高い「在宅で要介護3以上」の方が、約15万2千人もいるとのこと。す。2014・3・26・朝日新聞）また、このところよく耳にする、いつ自分がそうなるかわからない「認知症高齢者」も増え続け、厚生労働省の研究班が公表した推計は2012年時点で462万人、そして認知症予備軍とされるMCI（軽度認知障害）も含めると800万人以上になるといわれています。

認知症の方が、線路の上に乗っていて電車で轢かれて亡くなられ、後に鉄道会社からダイヤの乱れなどで生じた損害を遺族に賠償請求したというニュースが新聞に載っていました。当事者に責任能力がないとみら

れる事故で、どう安全対策を図り誰が損害を負担するのかも超高齢社会の課題となっています。徘徊での行方不明者が年間1万人を超え、つい最近も、NHKテレビのドキュメンタリーで放映された、7年間行方不明だった妻を親族が画面で見つけ、夫が東京から妻が収容されている群馬の施設に駆けつけたというニュースを複雑な思いを抱きながら見ました。高齢者・高齢社会は、あまりにも多くの問題・課題を抱えています。今月号では、「認知症」と、在宅でどのように介護しているのか、また、自治体はどのような取り組みを始めているのかについて述べてさせていただきます。

認知症と認知症予備軍とは

認知症とは、病気などで脳が変化する、記憶力や判断力、注意力などが

低下して、生活に支障が出ている状態といわれています。最も多いのが「アルツハイマー型」で、記憶障害や日時や場所がわからなくなったりする症状があらわれ、次に多いのが「脳血管性」で、意欲が低下し、感情の抑制が難しくなる等の特徴があるそうです。「レビー小体型」は、存在しないものが見える「幻視」や体のこわばりが特徴で、「前頭側頭型」は、同じ行動を繰り返す、我慢ができなくなる等の症状が目立つそうです。認知症が進むにつれ、暴言や妄想、徘徊・抑うつなどの症状もあらわれ、早めの治療で回復することもあるそうで、本人もそうですが、周囲でもおかしいと感じたらすぐ診断を受けることが大切とのこと。また、認知症予備軍（MCI）とは、本人は物忘れを自覚していますが、生活に支障がなく、認知症とは

いえない状態をいい、認知症になる可能性が高いけれども必ずしも発症するわけではない状態をいうそうです。(※1) 私もよく物忘れをしますし、どこに置いたか忘れてしまい頻繁にも探しをしています。言葉がなかなか出てこなくなり、周りからちよつとおかしいのではないかと言われたら、認知機能検査をしなければならぬと考えています。

認知症と向き合う家族

朝日新聞(2014・2・6)に次のような記事が載っていました。58歳になる母親が、3年前、当時大學生の息子が家に帰ると、明かりもつけないで母親がテレビの前について驚いたそうです。初めは更年期障害と医者から診断されたそうですが、その後、家族が仕事で家を留守にした時、母親の火の不始末が原因で自宅が全焼してしまい、そこで始めて「前頭側頭型認知症」と診断されたことです。母親の発症は家族の人生を揺さぶり、訪問介護・デイサービスを利用して日中一人になるとふいに外に出ることがあり、息子は片時も目を離せなくなり、母親が認知症というショック、見守りたい思

い等、様々なことが重なり、会社を退職しなければならなくなったそうです。父親は一家のあるじでしたから、苦渋の選択の上、介護・医療費で仕事を続け、娘も正社員から非正規社員に切り替え、できるだけ母親と過ごす時間を増やしていったそうです。しかし、次第に母親の介護サービスの利用の仕方をめぐって家族に意見の違いが出てきて、その後、娘は家を出たそうです。母親の症状は進み、昼も夜も歩き回り、介護する父親も息子が寝不足が続く、共倒れを避けるために、認知症の専門病院に母親を入院させたそうです。息子は、「なぜ母が認知症にならなければならなかったのか」と病棟を歩き回る母親を見ては、何度も心に問いかけて涙がこぼれたそうです。母親は昨年からは有料老人ホームで暮らし、息子も再就職して心にゆとりができて、それぞれが自分のペースで母親をたずねているそうです。これは、施設を利用して家族が家族らしさを取り戻した例ではないかと思えます。

また、認知症の義母が入った後にお風呂に入り、薬用入浴剤で色が濁っている湯船につかってゆつくり出てお風呂の栓を抜いたら、大便が転がっていきよつとまったことや、認知症が進んで、暴言や妄想、徘徊などが頻繁に起こり、1年目は家族皆で何とか協力して介護ができたけれど、2年・3年経つにつれて、皆が介護疲れで身体を壊す者まで出て、「誰も悪くない」のに家族崩壊が起こった例も聞いています。

周囲が病氣だとわかっていても、日に日に病氣が進行して周囲の皆のいうことがわからなくなり、皆がイライラして、大声でどなったり蹴飛ばしたり、冷静に考えるとかわいそうだと思うことも、つい我慢ができなくなり、虐待にまっていた例も耳にしています。

今まで苦労してきた分、これからの人生を楽しむ

団塊の世代以上の高齢者は、戦後の高度経済成長の時代に育ち、身を粉にして働き、妻子を養い、住宅ローンを組んだり子どもの学費を一生懸命捻出したりと、多くの人が苦労を重ねて人生を送ってきたと思います。息子・娘たちも独立し、やっと自分たちの人生を楽しもうと思った矢先に「認知症」と診断されたら、

本人も周りもどれほど衝撃を受けることでしょうか。また、苦労して育てた息子たちが、親の病氣を受け入れて介護をしてくれるか、という不安も絶えず彼らにはあるのではないかと思います。

今後は、自分で自分の「介護予防」をしていかなければならないと痛感します。日本の社会は、特養も待機高齢者が増え入居が難しくなり、生涯未婚率も増え独居老人の孤独死も日常のこととなりつつあります。しかし、「認知症」、「認知症予備軍」と診断されたとしても、医学が進歩し良い薬がでて、看護や介護も効果的な方法を研究し、個々人に合う様々な方法を使って、「認知症」の

進行を遅くし、あるいは改善することができるようになってきていると聞いています。診断の内容によって治療法が違ふと思いますが、各自治体も「介護予防」に取り組み始めていますので、よく調べてみることをお勧めします。

(※1) 『地域福祉情報』2014・1月号、読売新聞東京版 2013・11・26付、ジャパン通信情報センター《参考文献》平成25年版『高齢社会白書』：内閣府(2013)